運動の視点をもとに動きを見合いながら思考力・判断力・表現力を高める子ども

－　小学４年「ボールランドのポイントゲッターになろう～ゲーム～」の実践から　－

１　授業の構想

子どもたちの遊びの変化に伴い，一日の運動量の減少や，運動の種類の偏りなどにより，運動の二極化が進んでいる。本学級の子どもたちにおいても，附属小学校で行っている「運動カルテ」のソフトボール投げは全国平均と比べると少し低い記録である。その中でも10mにも満たない児童が男子２名，女子７名と，学級のおよそ３分の１の子がいるという現状である。また，３年生の始めの頃の記録と比べると，クラブ等の経験により，大きく記録を伸ばしている子もいるが，ほとんど変化のない子が多い。休み時間の姿を見ると，男女ともなかよくドッジボールをしている姿があるが，投力のある児童がボールを投げ合い，その他の児童は当たらないように逃げ回っている。ボールをもらったとしても，近くの子にパスをする程度である。このままでは，高学年になっても投球動作が身につかず，このまま中学年に経験がなければ，のびが出現しないままになってしまう可能性もあるため，体育の授業が果たす役割は大きい。

このような実態がある中で，下の日記は，リレー単元での本学級Ａ児のふりかえりである。

> 今日はすごいことがおきました。バトンパスの時にＢくんが二人ぬきをしました。どうやら，バトンパスのタイミングがばっちりあったようです。けど，私がＣちゃんにパスしようと思ったら少しはずれてしまってぬかされてしまいました。そこはすごく申しわけない気持ちでいっぱいです。でも，その後，みんな（Ｂコーチ！？）のおかげで，私が必要なこつもわかりました。なのでＢコーチの作せんではやくなりました。ありがと！Ｂくん！　（児童Ａ）

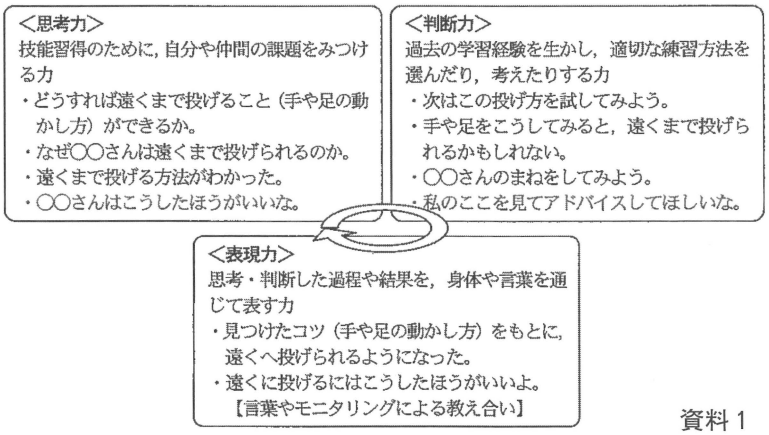
バトンパスの際に，児童Ａは，バトンを落としてしまったり，うまくつかめなかったりしていたが，チームの仲間にバトンパスを見られることで，少しずつ自分の課題がわかり，その課題を意識して練習していくことができた。その結果，チームの得点や記録も上がり，努力をしてできるようになったことや，仲間が支えてくれたことに喜びを感じていた。

そこで，本単元では，運動のこつを見つけながら，そのこつを共有し，かかわり合うことで自分や仲間の課題に気づき，その課題を解決していこうとする子どもの姿をめざし，授業を構想していった。

(2) 本単元の目標や内容と体育・保健体育科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本単元では，「ボールを遠くへ投げる」「狙ったところにボールを投げる」「ボールを捕る」「ボールを打つ」といった，ボールを操作する技能（主に手での操作）を高めることをねらいとしている。ボールを遠くへ投げたり，打って遠くに飛ばしたりするためには，体の捻転が必要である。この動作は，走や跳の動作と比べて身につきにくい。そこで，ボールを操作する場面をゲーム化したり，動作の視点を焦点化したりしていくことで，運動のこつを意識しながら，動作に慣れていくことができると考えた。

本学級の子どもたちは，初等部前期において，遊びの中でボールを使ったり，類似した動きをしたりしながら，感覚を磨いてきている。これをもとに，初等部後期にボールの投球



資料１

動作，捕球動作の仕方がわかり，できるようになっていくことで，中等部におけるボール運動の技能や思考力，判断力，表現力の向上につながる。たとえば，ボールを持たない動きに目を向けたり，自分たちの考えた作戦のよさを実感しながら学習したりしていくことができる。このように子どもたちは，確実な力を身につけることにより，新たな気づきが生まれ，学習をさらに深めていこうとすることができると考えた。

そこで，ボールをつかった運動の特性を生かした動きの中で，その運動の局面をしぼり，子どもたちの視点を焦点化しやすくしながら，お互いの動きを見合う場面を設け，アドバイスし合うことで，投球動作や捕球動作の動きを身につけられるように構想していった。体育・保健体育科で考える思考力・判断力・表現力と照らし合わせると資料１のようになる。

このように子どもたちの思考力・判断力・表現力が互いに作用し合い，高まっていく姿を期待した。子どもたちは「できる」喜びを感じることで，学習意欲をわかせ，次の「やってみたい」につなげていった。

(3) 11年間で育てる思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

初等部後期においては，先述したような思考力・判断力・表現力を高めるために，これまでの運動経験を生かしながら，自分や仲間の課題をみつけ，運動のポイントを考えて，身体を動かすことができるようにしていっている。そのためには，子どもたちの実態をもとに，今後の学習にむけてどのような力をつけていくのかを明確にし，適した運動を経験することで，確実な力を身につけさせていく必要がある。そこで，本単元では，次のような視点に重点をおき，学習を展開していった。

①系統性をもとに身につけたいボール操作の運動感覚を意識できるようにし，もっと得点をたくさん取るための方法を考えようとする場面を用意する。

ボールを操作する技能を高めていくために次の３つの場面を用意することとした。

○スパッ：パスされたボールをキャッチして，狙ったところへシュートをする。
　相手が捕りやすいボールを投げる
　ボールを持った瞬間に次の動作へ移る
　狙ったところへ力を調整しながらボールを投げる
○ビューン：ドッジボールをできるだけ遠くへ投げ，仲間が捕る。
　全身の力をボールに伝えながら投げる
　落下地点を予測しながら移動してボールを捕る
○カキーン：止まっているボールを打って遠くへ飛ばす。
　用具を操作してその力をボールに伝える

上記の運動には，互いに共通している運動局面があるものや，他の型に属する運動の局面と共通しているものがある。互いに共通している運動局面には，ビューンやカキーンにおいて遠くへ投げたり，打ったりするための，「体を半身にする（腰の捻転が生まれる）」「肘と肩を後方に引く」「足をふみだす」などの動きがある。

また，他の型に属する運動の局面においては，力を調整しながらバスケットボールを狙ったところへ投げるために，両手で投げ上げる動きがある。これは，バスケットボールの動きだけでなく，バレーボールの一部の局面にも類似している。キャッチする場面においても，その運動の状況によって取り方が変わってくるが，類似している局面がある。このように，動きを局面ごとに細分化してみると，今回設定した，３つのゲーム場面の中には，複数の技能が含まれている。これらの技能が身につくことで高学年でのボール運動へとつながっていく。このような場面での運動の成果を得点化することで楽しみながら学べるようにしていき，ボール操作における多くの感覚を身につけられるようにしていった。

②互いの動きを見合いながらこつに気がつくことができるように，視点を焦点化する。

リレーの単元では，手の平を焦点化したように，視点を焦点化し，動きを見ることのよさを感じさせ

たい。動作の全体をぼんやりと見るのではなく，発達段階に応じて，運動に必要な部分に目を向け，こつとなるポイントに気づいていけるようにしていった。

一瞬の動きの中で，ボールを操作するのに必要な動作を見逃さないためにも，子どもたちの視点を焦点化することができるように印（ゲッターマーク）をつける。チームの中で，点をたくさん取ることができる子は，どのような動作をしているのかを見ながら，全体でみつけたこつを共有化していく。そのこつをもとに動きを見合いながら，それぞれの課題をみつけ，解決していくことができるようにアドバイスし合い，試そうとする姿を期待した。アドバイスをしようとすることにより，こつを意識しながら一人ひとりの動きに目を向け，自分の動きや理想の動きと比べながらイメージをすり合わせていくことができる。それにより，動きのよさを感じ，思考をさらに深めていくことができるようになる。

③教師のはたらきかけ

教師は子どもたちが進んでかかわろうとする雰囲気をつくっていくためにも，アドバイスする姿やこつをみつけようとする姿を認めていく。そのような，学び合おうとする雰囲気の中で，子どもが動きのよさを明確にしていくことができるように，自分の動きで実演しながら動きのよさを伝えたり試そうとしたりしている子や，相手の動きを見る場所を工夫している子の姿を価値づける。そうすることで，追求していく運動の視点に目を向けることが難しかった子は，こつをみつけるための視点のもち方を意識するようになり，追求をしてけるようになる。また，みつけた動きのよさについて，「ここをこうしてここのあたりから…。」や「強く…」などの表現をする子がいるだろう。この子に，「ここ（こう）」や「強く」といった表現がより具体的になっていくように「ここってどこのことかな」などと問い，考えを掘り下げる。そうすることで，「ここっていうのは足の裏が…。」など，子ども自身が再認識できたり，みつけた動きのよさが全体に共有されるものになったりしていくだろう。このようなはたらきかけをすることにより，アドバイスをすることや，こつをみつけようと思考を深めていくこと，こつをもとに運動をしようと判断することのよさを感じられるようにしていきたい。

2　展開計画

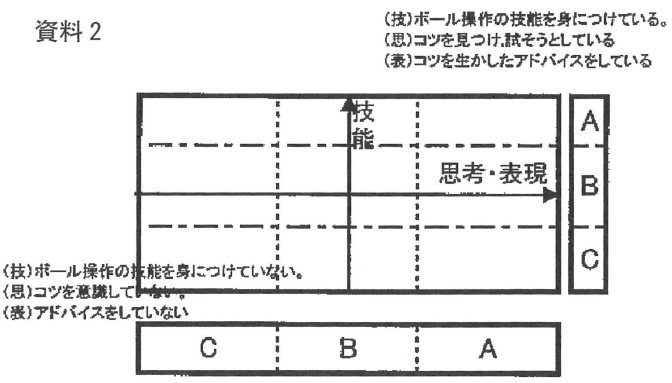
次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は，学級全体の学び合いの場面）
1	附小ボールランドでたくさん点を取ろう。	1	・ボールランド３つのコーナーを経験し，始めの得点を知るとともに，自分のよかったところや困ったところ，仲間のよかったところをみつける。
2	たくさん点を取る方法をみつけよう。 ・スパッ（バスケット）の点の取り方をみつけよう。 ・スパッで点を取るためのキャッチの仕方を考えよう。 ・カキーン（バッティング）で遠くへ飛ばそう ・ビューン（ボール投げ）の点の取り方をみつけよう。 ・ビューンで点を取るためのキャッチの仕方を考えよう。	 2 3 4 5 6	 ・たくさん点を取るためのシュートの打ち方をみつける。 ・飛んできたボールや次の動きにつなげるためのキャッチの仕方をみつける。 ・ボールを打って遠くに飛ばす方法をみつける。 ・ボールを遠くに投げる方法をみつける。 ・ボールを落とさないためのキャッチの仕方をみつける。 ◇よかったところや困ったところをもとに，多く得点している子の動きからこつをみつけ，動きを見合いながら，課題をみつけ，アドバイスをする。
3	附小ボールランドチャンピオン	7	これまでの学習を生かしながら，アドバイスをし合い，記録をのばす。

3　学び合いによる思考力・判断力・表現力の評価

単元構成において設定した学び合いの場面において，形成評価を参考に子どもが自分で気がついたこ

とや，周りの意見から気づいたことなどをふりかえった。それをもとに分析していくことで，子どもたちが互いにアドバイスし合った内容や，子どもの動きをもとに与えた教師の視点によって，一人ひとりの考えがどのように変容していったのか評価した。なお，技能においても，肘と肩を後方に引く動作から体を捻転させて投げることや，投げ手側の反対の足の投方向へのステップを加え，体重を移動して投げることに規準をおいて評価した。

資料２



また，単元全体を通して，子どもの思考力・判断力・表現力がどのように高まったかを評価するために，子どもたちのふりかえりや実際の動きをもとにその流れを２軸の表（資料２）に表していった。その実態をもとに，個やグループへのはたらきかけを明確にし，指導に役立てていった。

次	時	学習活動	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	評価基準		
					A	B	C
2	2	◇たくさん点を取るためのシュートの打ち方をみつける。	点を取るためのシュートの打ち方について，こつを見つけ，アドバイスをしようとしている。	体育ノート 発言	シュートを打つための手や足の動かし方がわかり，相手の課題にあったアドバイスをしている。	シュートを打つための手や足の動かし方はわかるが，相手の課題にあったアドバイスをしていない。	シュートを打つための手や足の動かし方がわからず，アドバイスをしていない。
	3 6	◇たくさん点を取るための，キャッチの仕方をみつける。	点を取るためのキャッチの仕方について，こつを見つけ，アドバイスをしようとしている。	体育ノート 発言	キャッチするための手の動かし方がわかり，相手の課題にあったアドバイスをしている。	キャッチするための手の形はわかるが，相手の課題にあったアドバイスをしていない。	キャッチするための手の形がわからず，アドバイスをしていない。
	4	◇たくさん点を取るためのボールの打ち方をみつける。	点を取るためのボールの打ち方について，こつを見つけ，アドバイスをしようとしている。	体育ノート 発言	ボールを打つための体の捻り方がわかり，相手の課題にあったアドバイスをしている。	ボールを打つための体の捻り方はわかるが，相手の課題にあったアドバイスをしていない	ボールを打つための体の捻り方がわからず，アドバイスをしていない。
	5	◇たくさん点を取るためのボールの投げ方をみつける。	点を取るためのボールの投げ方について，こつを見つけ，アドバイスをしようとしている。	体育ノート 発言	遠くへ投げるための体の捻り方がわかり，相手の課題にあったアドバイスをしている。	遠くへ投げるための体の捻り方はわかるが，相手の課題にあったアドバイスをしていない	遠くへ投げるための体の捻り方がわからず，アドバイスをしていない。

４　授業の実際

(1) 子どもの発達段階をとらえ，身につけたいボール操作の運動感覚を意識した運動場面を取り上げる。

ボールを操作する技能を高めていくために，「スパッ」「ビューン」「カキーン」の３つの場面を取り上げていった。この３つの動きには類似した動きも含まれるため，一つの技能を身につけてくことで，他の技能も相乗的に高まっていった。子どもたちの中では，時間を重ねるごとに，「カキーンのときに遠くへ飛ばしたときの動きに似ているぞ」「足を前に出す動きをつかってみよう」などの言葉が出るようになっていった。ボール運動の中でもやさしい運動であるために，動きのこつがはっきりしており，そのこつを共有しながらお互いに動きを見合ったり，アドバイスしたりすることができた。ボール操作のために必要な，飛んできたボールを処理するための準備動作やボールに力を加えるための体の捻転動作が身につき，記録も大幅に変化していった。

これらのことからボール運動における基本的な動作を身につけ，ゴール型，ネット型，ベースボール型の運動にふれる際に，身につけた力を生かし，想起しながら運動することができると予測される。

(2) ゲッターマークをつけて互いの動きを見合いながら遠くへ投げる動きの視点を焦点化する

一瞬の動きの中で，ボールを操作するのに必要な動作を見逃さないためにも，子どもたちの視点を焦点化することができるように印（ゲッターマーク）を投げる側の手の肘と反対側のつま先につけておこなった。動きのポイントを焦点化することにより子どもたちは，

ゲッターマークの場所

- 遠くへ投げる子の動きを見て，どのように動いているのか見つけようとする姿
- チームの仲間のためにスローモーションでやってみせる姿
- 話し合ってこつを見つけようとする姿

などが見られるようになった。4年生の実態をふまえ，動きを見合う視点を焦点化することにより，子どもたちはいろいろな動きを試し，よりよい方法を見つけようとしていた。一つの考えから抜け出せない場合は，気づいていない点については，子どもたちの動きの中から取り上げ，提案していったことで，新たな視点で考えることができるようになっていった。

(3) 共有化されたこつをもとに具体的な視点をもってチームの仲間と動きを見合えるようはたらきかける

チームで互いの動きを見合いながら遠くへ投げるこつを見つけたところで，どうするとよいのか全体で話し合った。

T１　：ボールを遠くへ投げるにはどうしたらよかったかな。
児童A　：ボールをあまり下の方で投げない。（実演しながら）ここならいいけど，遅いと下にいっちゃう。
T２　：肘のゲッターマークはどう動いてる？
児童C１：こうやって…（実演）。
T３　：こうやってってどう言えばいいかな。
児童D　：耳の横らへんにくるといいよ。
T４　：その後は？
児童C２：ボールを離すときはまっすぐにして，さっきも出てたけど足はカキーンのかっこと同じようにするといいよ。
T５　：腕のところや足を動かすこつがみつかったね。それでは，お互いの動きを見てアドバイスをしてあげよう。それともう一つ。投げるときは，肘やつま先とか，仲間にどこを見てほしいのか言うんだよ。

それぞれのチームで見つけたこつを出し合い，こつの共有化を行った。子どもたちはゲッターマークを中心に動きのこつをみつけていったが，実演しながら「こうやって…。」という姿が多く見られた。その「こうやって…。」という言葉だけでは，全体としての共有は難しいので，考えを掘り下げていった。すると，子どもたちはゲッターマークの軌跡や肘の場所について具体的に話すようになり，考えが深まっていった。

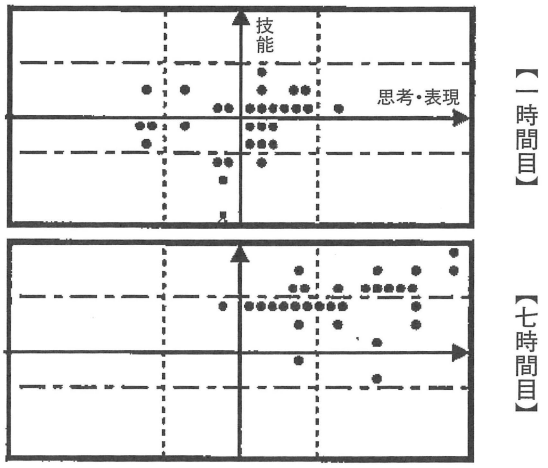
つま先のゲッターマークの動きをしゃがみこんで見る児童

また，共有化されたこつをもとに実際に動いてみるときに，自分が仲間に「つま先を見てて」など，見ておいてほしいポイントを伝えさせたことにより，自分の課題をはっきりさせながら練習をすることができた。チームの仲間もその子がうまくなることができるように，真剣に見ようとしたりする姿が見られるようになっていった。中には，より動きがわかるようにと見る場所を前や横や後ろなど，色々と試すようになっていった。さらには，こつを

共有化したことで，めざす動きになっているのか見ようとして，しゃがみこみ，足の動きを集中して見てアドバイスをする姿もあった。そのような見方，アドバイスの仕方が全体へと広がっていき，技能の伸びも見られていった。

(4) 子どもの変容

資料３



形成評価を参考にして，技能面，思考面，表現面について子どもたちがふりかえり，それをもとに得点化したものに，実際の記録と教師の観点を加えたこの３つをもとに２軸のグラフ（資料３）に表していった。

１時間目の様子を見ると，半数の子は技能的にも投げたり打ったりすることが身についていなかった。また，それぞれのチームの中で，積極的にアドバイスをしようとする子も数人いたが，感覚的なアドバイスが多く，アドバイスをされた子は，言いたいことはわかるんだけど，自分がどうしたらよいのかわからないという状態であった。ふりかえりを見ても経験のある子は，具体的な運動のポイントに気づくことができていたが，「楽しかったけど，どうやったらたくさん点がとれるのか，なんとなくわかるけど，はっきりとはわからない」という子も多く，運動のポイントに気づくことができていない状態であった。

スパッ，ビューン，カキーンの動きのこつを見つけていきながら先述したような展開をしていったことで，子どもたちのふりかえりにも変化が見られるようになっていった。ボール操作に苦手意識があった子は，普段の授業の中でも相手の動きをよく見て，なんとかできるようになろうと努力していた。始めはシュートも入らなくて暗い表情をしていたが，スパッの場面でシュートが入ったことにより，自分の成長を感じ，少しずつ自信をつけていった。こつを意識して練習をし，周りからアドバイスをされることで「わかる」ことが「できる」ことにつながっていった。さらに，「できる」ようになったことで，ボールを操作する運動のこつに実感をもつことができ，ひじやつま先を中心に相手の動きを見て，アドバイスをするようになり，「できる」ことが次の「わかる」につながっていった。「私はひじが耳の横ぐらいにくるようにすることができるようになればもっと記録が伸びそうだよ。」とうれしそうに話していた。単元の終わりの頃には，全体的にチームの仲間にも，相手の課題をもとにじっくり動きを見てアドバイスをする姿が多く見られるようになり，チームの仲間での話し合いが活発になっていった。

5　成果と課題

子どもたちの発達段階をとらえながら，運動の視点を焦点化したことにより，子どもたちは運動のこつに気づき，記録を大きくのばしていった。その上で，互いの動きを見合うことで，自分自身や仲間の課題がはっきりとしていき，声をかけ合う姿が多く見られるようになっていった。さらに，子どもたちの考えを掘り下げていくことにより，考えがより具体的になっていき，子どもたちの中で運動のポイントが共有できるものとなっていき，ボール操作技能を高めていくことができた。

しかし，視点を焦点化する際に，子どもたちは動きをスローモーションにしてこつを理解し合おうと工夫する姿もあったが，記録をねらった動作からは，動きが一瞬であるために見えにくく，課題を発見したり，アドバイスをしたりすることが難しくなってしまうこともあった。

また，話し合いはグループでも全体でも行われていたが，子どもたちが話し合って気づいたことをすぐ試すことができていなかった。アドバイスされたことを実際に試しながらフィードバックし，実感を伴いながら技能をのばしていくことができるように場面を構成していかなければならない。そうすることで，子どもたちはさらに思いを伝え合う場面が増え学び合いを深めていくことができたように思う。

（文責　小草　康弘）